

晩秋と初冬と

著者	平木, 恭三郎
雑誌名	龍南
巻	2 0 9
ページ	2 5 - 2 7
発行年	1929-02-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/9055

晩秋と初冬と

平 木 恭 三 郎

山は暮れて櫨に尾花の混りたる

霜置くや南瓜の枯葉ハナ菌のごと

破れ傘を手に傳ふ時雨の美しき

野焼して女郎花のみ残りたる

芒並ぶ線路の曲り東に

霜除の足らぬ所へ芒かな

芒残る山表なる空ら畑

色鳥去て柿の種のみ残りたる

霜枯れの芋の臺や野焚火す

齒なき母蜜柑を貰す縁小春

風の朱樂^{すま}吹落す月夜かな

赤い椿櫓の中に混つてゐる

眼白聞いて埋火探す雪氣哉

寢つき兼ねて眼白啼きたり小夜時雨

牡丹雪に息吹きかけて見る子かな

炭注ぐを止めて耳すます雪夕

狹筵に大根凍れる日向かな

一錢のルビーを貰る炬燵哉

雲晴れて凍れる旗の雫かな

軸に注ぐ芥子油の底の小さき粒

櫺の空を赤くして雪夜の小火事

遠吠やとぎれとぎれの深雪かな

鐘樓に甬掛^{すゐ}りて雪下し

薄氷を割りて繪具に混ぜにけり

笹鉸の隙間櫺枝下す鋸光る

雪氣の日出て垂せる如雨露光りぬ

南天の垂れ具合美し地蔵を廻る香

日落ちんとす病竹に眼白鳴きて

琴の音鶏の羽根散る道を行く(琴始)

黃梅咲きぬ電燈の光にかすかなる揺れ